モノづくりを考える！ 第55回

個人事業主の歩み 後編
―コロナ禍から現在へ―

擴製作所 大阪市生野区巽東4-6-6

以前から減っていた受注がコロナ禍を経てさらに減少した

前編で邊（ほとり）さんが1978年に創業、バブル崩壊とリーマンショックの経済変動を乗り越えたことを綴った。それ以降を後編として述べる。

1989年のワイヤーカット購入から30年を経過した2019年、1年かけて新型機械の導入を準備して契約を結んだ。その時はコロナのコもなかった。年が明けて予期せぬコロナ禍が始まった。その矢先の3月に機械が入った。こんなになるとは思いもしなかった。独立から43年、バブル崩壊や円高不況にリーマンショックと不景気はあったが、そんなのが問題にならないくらい深刻であった。これから先、町工場に仕事は戻ってくるのか。じり貧になるのを恐れる。

邊さんが行った設備投資（1989年ワイヤーカット、2019年新型機械）について問うと次のように答えた。

「バブル絶頂期にワイヤーカットを買った。バブル崩壊で苦境に陥ったが、ワイヤーカットの性能により受注の幅が広がったおかげで何とか乗り越えることができた。今回のコロナ禍においても同様の効果を期待しているが、納期やコストで有利になる新型機械の性能を頼りにしつつも、それだけではこの時代は乗り越えられないのではないかと思っている。」コロナ禍が収束しても需要が回復しないなか、邊さんは町工場が脅威に襲われていることを感じている。「今までにない要因があってここまで仕事が来ないのかと考えてしまう。ただ単に暇やから仕事来えへんだけでなく、もっと根本的に大きなことがあるのかと不安を強めている。」

邊さんが語る「今までにない要因」「根本的に大きなこと」とは何なのか。それは1989年と2019年のそれぞれにおける技術の違いによるものである。1970～80年代のNC（数値制御）化をふまえて1989年には日本国内で技能と情報技術の最適な組み合わせを実現していた。

しかし、デジタル化による標準化が進んで日本企業が東アジア諸国やASEAN諸国への技術移転を加速したのちの2019年には、モジュール（技能集合）化がグローバルな生産を広げて町工場の存立が脅かされている。2020年に邊さんが導入した最新機械を標準化に埋没しないで活かせることを願う。

【工場を記録する会　工場兄妹　兄の好行】